

## 平成 24 年度卒業研究発表会要旨集の巻頭にあって

永井 卓眞 (筑波大学 生物学類 4 年)

3 月になり試験も一通り終わり、春の香りが近づいてくるこの時期になると毎年卒研発表会の季節だと実感します。3 月とはいえ、筑波はまだまだ肌寒く冬の厳しさを感じます。

いざこの時になると、きっと多くの方が感じているように大学四年間があつという間に過ぎ去ってしまったと感じるばかりです。何も知らずに筑波の生活に慣れるので必死だった 1 年生のころ、専門の授業や実験に追われた 2、3 年生、研究の一端に身をおいた 4 年生。気づけばもう卒業になってしまいました。

1 年生の私にとって、卒研発表会に参加することは大きな衝撃になりました。4 年生の発表内容のほとんどが理解できなかったからです。タイトルに興味を惹かれ拝聴した発表も話についていくことがやっとでした。生物学に関する自分の知識の少なさを痛感したイベントとなりました。そして、2 年生の発表会では出来るだけ質問しようと決心し発表会に臨みました。3 年生では卒研発表会の運営側として参加をしました。そして、今年は私たち自身が発表する立場になりました。

卒業研究はたった 1 年間しかありません。その中で意味のあるデータが出せたのかと問われると、恥ずかしながら私は自信を持ってないと思います。研究とは時に残酷で、とても正直で、上手くいかない営みの繰り返しだと分かりました。しかし、私たち 4 年生が 1 年間研究して新たにわかったことも多からずあると思います。卒研発表会はその内容を発表するととても素晴らしく、得難い機会だと実感します。

1、2 年生の皆さんには私たちの卒研発表会が数年後の研究室選択の一助となれば幸いに思います。難しい内容かもしれませんが、理解しようとする積極性、疑問を抱いたら質問する習慣など普段の講義とはまた違った雰囲気味わって欲しいと思います。

3 年生の皆様には、卒研を準備・運営に尽力していただき心底感謝する所存であります。そして、こうして 1 年間研究ができたのは未熟な我々に愛想を尽かさず一から面倒を見ていただいた指導教官のおかげであると身にしみております。発表会ではどうか温かく見守っていただければと思います。

最後に私事で恐縮ですが、この時期になると、センター試験や 2 次試験などで高校生を多く見かけます。彼らを見ると、「私は大学で過ごした時間で何を得る事ができたのだろうか？」と自問することが多くなりました。概論から始まり、卒研まで確かに生物学の知識は身に付いたと思うのですが、果たしてそれ以外に何が得られたのだろうか。

その答えの一つがこの学校、学類で出会えた仲間だと思います。夜遅くまで続く実験やその結果が芳しくないときも仲間と支えあい、励まし合えたからこそ頑張れたのかなと痛感します。目指すものは違うかもしれませんがこの縁を大切に、これからの人生へ進んでいこうと思います。

Communicated by Mitsuru Hirota, Received January 29, 2013.